

特集「環境浄化」と「景観・アメニティ・ビオトープ空間の創出」に関するプロジェクト

1 農林水産環境に関するプロジェクト研究

はじめに

2002年4月から、5年間の計画で、農・林・水が連携して「環境浄化」と「景観・アメニティ・ビオトープ空間の創出」の二つのプロジェクトに取り組んだ。この背景には、農業生産を支える農村環境に、水系の富栄養化や生物多様性の低下等様々な問題が発生し、その基盤の維持・保全の意義が再認識され始めたことがある。本プロジェクトのまとめとして、幼稚魚を育てる「藻場マップ」づくり、ため池の環境浄化機能、基盤整備と「植物種多様性」の維持、里山林に適した果樹の管理法について紹介する。

成果の概要

藻場は水産資源の維持だけでなく海域環境の浄化の面からも重要な資源である。瀬戸内海の分布実態を把握して、その維持、回復に活かしてゆく。

ため池の類型別に各種成分濃度の実態を調査した結果、市街地型では窒素が多く富栄養化が進んでいるが、水生植物が繁茂する池ではアオコの発生は少ない。富栄養化の改善には、冬期の水抜き、泥さ

らえ、植物の刈取り等により池から栄養分を取り除く必要がある。

農村環境においては、長期間の休耕又は基盤整備のように人為的攪乱が無くても強すぎても生物多様性が低下するため、適切な管理が望まれる。また、高度に優占している植物を生態的管理によって衰退させることにより、植物多様性の保全・復元が可能である。

里山林の保全と住民の憩いの場を提供するねらいで、小果樹を植栽し、有望種を選定した。その結果、手入れが少なく済み、よく結実するクワ、ユスラウメ、キイチゴを選定した。

今後の方針

プロジェクト研究で得られた成果を農林水産施策として活用してゆく。そのために、行政、環境団体等広く県民に情報を提供し、環境維持保全に関する意識を高める。

河野 哲（環境部）
（問い合わせ先 電話：0790-47-2420）

2 幼稚魚を育てる「藻場マップ」づくり

ねらいと成果

藻場は、水産資源の維持・繁殖、海域環境の保全において重要な役割を果たしているが、埋立等により面積は減少しており、回復が望まれている。藻場の実態把握は、1990年の環境省の調査以来実施されていない。そこで、今後の藻場造成を計画的に推進するための基礎資料として、兵庫県の瀬戸内沿岸における「藻場マップ」を作成した。

内 容

藻場が減少している瀬戸内海側の主要な場所において、藻場分布、海底地形・地質を広範囲にわたり効率的に把握できるデジタルサイドスキャンソナーにより調査を行い、地理情報システム（GIS）ソフトにより「藻場マップ」を作成した（2006）。一例として赤穂市のアマモ場（図の緑色部分）のマップを示す。今回、本海域では、従来の藻場面積49.6ha（アンケート調査結果：2004年）よりかなり少ない7.2haという精密な調査結果が得られた。漁業関係

者は、アマモ場の現状面積は少ないと感じており、それを裏付ける結果である。アマモ場の回復、造成対策が望まれる。

今後の方針

今後、「藻場マップ」と併せて作成した「藻場造成指針」を漁業関係者及び海域の開発行為に携わる機関に提示し、藻場の維持・回復に役立てる。

三木 宗和（水技・資源部）
（問い合わせ先 電話：078-941-8601）



図 藻場マップ（赤穂市：アマモ場）